

カルマチャクメーの浄土思想とその影響

—ギェルケンポによるカルマチャクメー作『清浄大楽国土誓願』簡略版—

中御門 敬 教

はじめに

チベットで最も流行した極楽願文は、ゲルク派の開祖ツォンカパ（Tsong kha pa. 1357-1419）著述の『最上国開門』（*bDe ba can gyi zhing du skye ba 'dzin pa'i smon lam Zhing mchog sgo 'byed*）と、カルマカギュー派のカルマチャクメー（Karma Chags med / Rāgāśya. 1613-1678）著述の『清浄大楽国土誓願』（*rNam dag bde chen zhing gi smon lam*）である。我々が進めているチベット浄土教典籍の調査において、本稿で扱う『極楽国土経』（*bDe ba gyi zhing gi mdo*）¹⁾は、後者カルマチャクメーの著作に倣った、ゲルク派のギェルケンポ・タクパギェルツェン（rGyal mkhan po Grags pa rgyal mthsan. 1762-1837, 以下ギェルケンポ）による著述であることが新たに判明した。本稿はその詳細を記すものである。この二作は題名からは推察し難いが、親子のような関係にある。『極楽国土経』は『清浄大楽国土誓願』から三・四割程度を引用し、部分的に表現変更を行った読誦簡略版といえる²⁾。この簡略版は、原拠『清浄大楽国土誓願』の流通状況・知名度を探りたいそう興味深い存在である。この著作の経緯を『極楽国土経』奥書きに求めると以下の通りである。

「(4b3) +++の善知識であるコンチョクサンポと、工巧明の論者ガクワン・ヤンペルの二人が懇懃にお願いした折に、ギェルケンポ・タクパギェルツェンがシモ・チュンのデデン・チュキボタンにおいて著作した〔その〕筆受者〔の役は〕は沙弥コンチョック・テンジンが行った。これ〔の著作の善〕によっても教えと衆生に広大な利益が生じますように。善かれ。」

1) cf. *rGyal gzhi'i yig cha phyogs bsgrigs* (天津古籍出版社) vol.73, Ca. bDe ba can 1a-4b, pp.147-148

2) 引用方法としては「趣意要約の引用」、「同文の引用」、「一部表現変更の引用」にまとめられる。構成としては原文の前半と後半が抜き出された形となっている。

これによると、ゲルケンボは知人の要請に応じて『極楽国土経』を著述した以外に、具体的な著作意図や原拠『清浄大楽国土誓願』との関係は明らかではない。そこで題名（『極楽国土経』）中の「経（mdo）」という特徴的な語を手がかりに若干の確認を行いたい。そもそも『極楽国土経』は本体『清浄大楽国土誓願』と共に、經典（mdo）ではなく、明らかにチベット撰述仏典である。この点について、チベット語における「mdo」の意味を『蔵漢大辞典』から確認すれば、「重要部分、交差点、屋外、低地、經典、顕教」の意味が挙げられる³⁾。これを参考に『極楽国土経』に視点を移すと、『清浄大楽国土誓願』の重要部分を取り出して「要約版」の体裁をとった可能性が伺われる。阿弥陀仏や極楽世界を観想し、往生祈願をより容易にするための手段として、その内容を簡略化した著作である。元来インドでは、論点・要点をつなぎ合わせたものが「経」（Skt. sūtra, Tib. mdo）と呼ばれていた。例えば仏教方面では、世親の直弟子であり、論理学の巨匠陳那（Dignāga. 480-540）の主著〈集量論〉が「経」と呼ばれるごとくである（これはプラマーナに関する自説の集成であり、以降の見解の基準となったものである）。こうした語義伝統がチベットにおいても適用されたとみるべきであろう。また『極楽国土経』は量的に短縮され、「読誦經典」としての便宜をはかる点から、「重要部分、經典、顕教」という三重の意味をこの「経」は担うと考えられる。こうした經典要約・簡略版は、チベット撰述仏典において時折見られる著述形態である⁴⁾。確認のために、『極楽国土経』の全容を確認す

3) mdo / (cf. 『蔵漢大辞典』 p.1381a)

1. nyung ngur bsdu pa'i sdom mam gnad 'gag / (小さくまとめた要点、あるいは基本部分（重要部分）)
2. chu dang / lam sogs kyi 'dzoms 'gag / (水と道などの交わるところ)
3. khang pa sogs kyi phyi 'am mda' / (建物などの外、あるいは低い部分)
4. sde snod gsum gyi nang las mdo sde / (三蔵の中から「経」)
5. mdo sngags kyi zlas dbye ba'i mdo / (顕密という対概念が分かれたうちの顕教)

インド仏教における「経」四義については本稿末の付録を参照のこと。

4) 浄土教関係のものとしては以下の事例を参考のこと。

【阿弥陀経関係】

- ・リクジン・ツェワンノルブ（Rig 'dzin Tshe dbang nor bu. 1698-1755）『極楽莊嚴経の意味の通りの誓願 —解脱開門— (*bDe ldan bkod pa'i mdo don ji bzhin pa'i smon lam —Thar pa'i sgo 'byed—*)

cf. bKra shis 編, *bDe smon phyogs bsgrigs stod cha* (祝詞集上巻), Si khron mi rigs dpe skrun khang (四川民族出版社), 1994, pp.140-149

著者はニンマ派の高名な学僧である。チョナン派の教義をも継承しており、カルマ派のシトッ・チョーキジュンネーにも教えている。本書は、文言・内容を〈阿弥陀経〉からほぼそのまま受け継ぎ、分量を〈阿弥陀経〉の約3分の2に要約したものである。

ちなみに通常、〈無量寿経〉蔵訳名は '*Od dpag med kyi bkod pa* であり、〈阿弥陀経〉蔵訳名は *bDe ba can gyi bkod pa* である。冒頭には〈阿弥陀経〉には見られない無量光仏に対する帰敬偈がおかれる。それ以後は〈阿弥陀経〉に忠実に倣い、八つの往生祈願文を入れ、趣意要約の文が繰り返される。 ↗

ば以下の通りである。

1. 西方極楽世界の位置 (1b1ff.)
2. 阿弥陀仏の身体的特徴 (1b2ff.)
3. 阿弥陀仏の眷属 (2a2ff.)
4. 七支供養から敬礼 (2a3ff.)
5. 七支供養から供養, 懺悔 (2a4ff.)
6. 七支供養から懺悔 (2b4ff.)
7. 七支供養から懺悔, 加持祈願 (2b5ff.)
8. 七支供養から随喜, 勧請, 懇願, 廻向 (2b6ff.)
9. 往生祈願⁵⁾ (1) (3a3ff.)
10. 往生祈願 (2) (3a5ff.)
11. 往生祈願 (3) (3b2ff.)
12. 奥書き (4b3ff.)

この構成を一見すると菩薩戒七支供養の延長線上にあり、その意味では本作は密教成就法と共通する。通常の阿弥陀仏成就法では、帰敬偈、著作の意図、阿弥陀仏の身体的特徴、七支供養を中心とする「前行」、阿弥陀仏との成就をはたす「本行」、まとめの「結行」が骨格となっている。『極楽国土経』では、極楽往生の成就祈願となっている箇所が、密教成就法の「本行」にあたっているだけで、構成はおおよそ一致する。つまり『極楽国土経』は『清浄大楽国土誓願』の重要部分を抜粋した、顕教方面の阿弥陀仏儀軌ともいえよう。『清浄大楽国土誓願』自体、冒頭で「この [[清浄大楽国土誓願]] は顕教流であるために、[伝統の師からの] 伝授 (lung) を得ていなくても称えるのがよい ('di ni mdo lugs yin pa'i phyir // lung ma thob kyang 'don ni rung //)」と説くごとくである。資糧田儀軌やグル・ヨーガの類が密教成就法から観想を主とする一般的行法へ展開したごとく、『極楽国土経』もその展開上にあることが理解できる。

↘ 【阿閼仏国経関係】

- ・ チョネ・ダクパシェードゥブ (Co ne Grags pa bshad bsgrub, 1675-1748)
『勝者阿閼の国土を見せるもの —かの最上国に往く階梯—』(rGyal ba Mi 'khrugs pa'i zhing la rnam par lta ba byed —Zhing mchog der bgrod pa'i them skas—)
cf. Co ne grags pa bshad sgrub kyi gsung 'bum, dPyad gzhi'i yig cha phyogs bsgrigs (天津古籍出版社) Vol.41, 1a-11b, pp.169-174
解題、著者情報、現代語訳については藤仲、中御門 [2007] を参照のこと。
- 5) 9～11には極楽世界の理想的な荘厳や特徴が説かれ、往生の祈願文が繰り返される。

・ギェルケンポの生涯

著者ギェルケンポ・タクパギェルツェンは十八世紀から十九世紀にかけて活躍したドメ出身のゲルク派の学僧である。タシキル寺やデプン寺のゴマン学堂で学んだ後、タシキル寺に戻り、そのラプラン (Bla brang) の親教師や貫主を務めた。また寺や塔の建立にも努めた。デプン寺ではチュコルギェル (Chos 'khor rgyal) の親教師 (mkhan po) を務めたことから、ギェルケンポ (rGyal mkhan po) の名がある。ここではその詳細の一例として、*Dung dkar tshig mdzod chen mo* 掲載の彼の項目を試訳したい。以下の通りである。

・*Dung dkar tshig mdzod chen mo* (中国蔵学出版社, 2002年, pp.652a-653a)

「ドメ南方のボラ ('Bo ra) のギャカルタン (rGya sgar thang) という所で、父ユンキャブ (Yum skyabs) と母ハモツォ (lHa mo tsho) 二人の息子として、第十三ラブジュンの水午 (1762) 年に誕生なさった。七才から開始して、マンゲー (Mang nge) の比丘ツルティムギャンツォ (Tshul khri ms rgya mtsho) から、文字の読みと誦える方法を学んだ。十一才にしてセラ [寺] (Se ra) の軌範師ロサンチューペル (Blo bzang chos 'phel) のもとで出家した。名はロサンドゥンドゥブ (Blo bzang don grub) と命名された。水蛇年にタシキル (bKra shis 'khyil) の学堂において軌範師ガクワン・ティンレーパ (Ngag dbang 'Phrin las pa) から口述 [の教え] をお聞きになった。「円満尊」(Phun tshogs lha) を描いた貴族の子弟ロサンベルデン (Blo bzang dpal ldan) に師事した。十六才にして軌範師ソナムタクパ (bSod nams grags pa) から沙弥を成就した。『撰類学』(bsDus grwa), 『心類学と因類学』(Blo rtags), [ジャムヤン・シェーパ二世 ('Jam dbyangs bzhad pa. 1728-1817) の著作] 『学説宝蔓』(Grub mtha' rin chen phreng ba) 等を暗記し、大衆に対して行を捧げた。その年に [デプン寺の] ゴマン (sGo mang) [学堂] のラマであるサンギェ・ドルジェパ (Sangs rygas rDo rje ba) の生まれ変わりとして認定されて、[その] 座につけられた。それからハシ・カチューパ (lHa zhis dka' bcu ba) とカギャダルギェ (Kha gya dar rgyas) の二人に師事して、五部大論 (般若, 中観, 論理学, 律, 俱舍) 等を順次に聴聞修学なさった。二十一才にしてキャブゴンチョク (sKyabs mgon mchog) のもとで具足戒を受けた。名はタクパゲルツェン (Grags pa rgyal mtshan) と命名された。リクダ・ロサンジクメ (Rigs grwa Blo bzang 'jigs med) とクシュリー・ケルサン (Ku shri sKal bzang) の二人から詩学等の明処を学習した。ソナムタクパ師弟と座主ロサンニェンダク (Khri chen Blo bzang snyan grags) 等から多くの法をお聞きになった。水卯 (1783) 年に中央 [チベット] に行かれた。ダライラマ八世ジャンベルギャンツォ (rGyal dbang

'Jam dpal rgya mtsho') に拜謁した。デプン [寺] のゴマン学堂に入った。モンゴルのケルサングドゥブ (sKal bzang dngos grub) とクンタンジャンペルヤン (Gung thang 'jam dpal dbyangs) の二人に師事した。二十五才火午 (1786) 年に地方政府からチュコルギェル (Chos 'khor rgyal) の親教師 (mkhan po) に任命された。その折に五部大論の学習を完成なされた。ラサ (lHa sa) のモンラムチェンモ (大誓願祭) における [問答大会で] 最初の立宗を行った。ゲシェ・ハランパの学位を得た。鉄戌 (1790) 年にドメのタシキル [の学堂] に行かれた。ジャムヤン・シェーパ [二世] ('Jam dbyangs bshad pa. 1728-1791) がこの尊者をラプラン [・タシキル] (Bla brang cf. 成田山新勝寺 [1997] p.37) の親教師 (管長, mkhan po) に任命した。講説, 弁論, 著作の三つによって仏教と衆生に利益の行いをなされた。新しい多くの [信仰の] 依処 [すなわち仏塔, 仏像] を造られた。三十才にしてタシキルの法と世間の行い全ての責務を受けられた。四十才にしてラプランの大衆の主座に就かれた。三年の間, 定例の布施のほとんどをラプラン・チェンポ (ジャムヤン・シェーパ二世?) から引き継いで, 従来のものを発達させた。四十三才にして座主に就けたいとお考えを承けて, ジャムヤン・シェーパ [二世] が人々の中央に招き迎えた。木の年から, 隠居地であるタシのゲーペル (bKra shis dGe 'phel) で隠遁五, 六年ほど居られて, 以後は行を行うことだけに努めて, 時を過ごされた。ペルの遺跡の地であるマ (rMa) の傍らのセルルン (gSer lung) に修行場を建立した。著作は、『無比釈迦勝者と瞻部洲を美しくする六人 [龍樹・聖提婆・無著・世親・陳那・法称] の莊嚴と最上の二人 [釈迦光・徳光] のアヴェダーナ —尊の如意樹—』 (*mNyam med Shā kya'i rgyal po dang 'Dzam gling mdzes byed rgyan drug mchog gnyis kyi rtogs brjod —lHa'i dpag bsam ljon shing—*), 『莊嚴経論の割註』 (*sDo sde rgyan gyi mchan 'grel*), 『入菩薩行論の註 —宝蔓—』 (*Byang chub sems dpa'i spyod pa la 'jug pa'i ti kka —Rin po che'i phreng ba—*), 『讚頌集 —悉地を招く鉄鉤—』 (*bsTod tshogs —dNgos grub 'gugs pa'i lcags kyu—*), 『善を正等覚に廻向する願文』 (*dGe ba rdzogs byang du bsngo ba'i smon tshig*), 『テンパシェーラプタシの行状伝 —真珠の蔓—』 (*Dran pa shes rab bkra shis kyi nam thar du —Mu thi li'i phreng ba—*), 『入菩薩行論』 (*sPyod 'jug*), [ゲルク派のツォンカバ著] 『道の要』 (*Lam gtso*), 『律大海精髄』 ('*Dul ba rgya mtsho'i snying po*, cf. 東北 Nos.5275-63, 6848, 6850), [カダム派のトクメーサンポ著] 『仏子の実践』 (*rGyal sras lag len*), 『クンタンリンポチェの正見歌釈』 (*Gung thang rin po che'i lta mgur*) 等の註釈, 『金剛怖畏の生起次第』 ('*Jigs byed bskyed rim*) 等の六経函ほどをお造りになった。甘露の御言葉によって養った弟子, ティチェンガクワンチュペル (Khri chen ngag dbang chos

'phel), ドチリンポチェ・ジャムヤントゥブテンニマ (rDo khri rin po che 'Jam dbyangs thub bstan nyi ma), チャンルンのパンディタ・ガクワンロサンテンペーギェルツェン (lCang lung Paṇḍita Ngag dbang blo bzang bstan pa'i rgyal mtshan), テクチェンニユンネーパ (Theg chen smyung gnas pa), チャハルカギェルパ (Cha har bka' 'gyur ba) 等の多くの優れた学者・行者を生じた。七十六才になられて、第十四ラブジュンの火酉 (1837) 年に思いは利他のために [今世から] 逝去された。」

・ギェルケンポの浄土教関連典籍

ギェルケンポと縁の深いデブン寺ゴマン学堂の本堂一階には、無量寿仏堂、阿閼仏堂、ターラ菩薩堂、二階には護法神堂が存在する。我々が確認した限り、阿閼仏は密教の主要尊 (東方主仏) であるにも関わらず、この尊格に関する典籍はほとんどないことが知られており、チベットでも思いの他少ない。彼の阿弥陀仏・阿閼仏関連の著作は、デブン寺の宗教環境が反映された可能性もあろう。彼が軌範師 (mkhan po) を務めたラプラン・タキシルはデブン寺の系統でもある (cf. 成田山新勝寺 [1997] p.37)。ギェルケンポに先行して阿弥陀仏・阿閼仏関連の著作を行った者に、ゲルク派のツォンカバやチョネ・タクパシェードゥブ (Co ne Grags pa bshad sgrub. 1675-1748) らがいる (cf. 藤仲, 中御門 [2007])。

阿弥陀仏関係

- ・『安楽国土の主無量光, 所依能依を合わせたものに関する話の正説 一見ると有益なもの』⁶⁾
- ・奥書き (41a3-7) ⁷⁾

「安楽国土の主無量光, 所依能依をあわせたもの +++ 見ると有益な宝玉の藤,

6) *bDe ldan zhing gi dGon po 'Od dṅag med rten dang brten par bcas pa las brtsam pa'i gtam yang dag par brjod pa mThong ba don ldan nor bu'i 'khri shing*
cf. *rGyal mkhan po Grags pa rgyal mtshan gyi bka' 'bum*, dPyad gzhi'i yig cha phyogs bsgrigs (天津古籍出版社) Vol.73 Nga, dKar 1a-41a, pp.1-21

7) *bDe ldan zhing gi dGon po 'Od dṅag med rten dang brten par bcas pa'i +++ mThong ba don ldan nor bu'i 'khri shing dDe ldan zhing du bgrod pa'i them skas zhes bya ba 'di ni / snyigs dus kyi 'dren pa mtshungs med rGyal ba'i sku rin po che bsKal bzang dge legs rgya mtsho'i zhal snga nas +++ / dpon +++ nor bu / +++ dkon mchog rgya mtsho dang/ 'Jam dbyangs brtson 'grus dang / rigs pa'i gnas la blo gros kyi snang ba rgyas pa rab 'byams pa mthu stobs rnams kyi yang yang bskul ba la brten nas / rGyal mkhan po Grags pa rgyal mtshan gyis sTon pas mnyam med du +++ bden bzhi'i chos kyi 'khor lo thog mar bskor ba'i Chu stod zla ba'i yar ngo 'i rdzogs pa gsum pa'i nyin sbyar ba'i yi ge pa ni dGe tshul dKon mchog bstan 'dzin gyis bgyis pa 'di kyang 'gro ba mtha' dag bDe ldan zhing du 'jug pa'i rgyu gyur cig // mangalam //*

安楽国土に往く階梯という本書は、濁世の無比の導師、勝者身の宝、ケルサン・ゲレク・ギャムツォ御前から+++，+++の宝，+++コンチョック・ギャムツォと、ジャムヤン・ツォンドゥーと、明処に知恵の光明が広大なラプジャムパ・トゥツプによりたびたび勧められたことに依って、教主〔釈迦牟尼〕が舎衛城に+++四諦の法輪を最初に転じた箕宿月〔チベット暦六月〕の上弦の三つの円満日〔である五日、十日、十五日に〕ゲルケンポ・タクパギェルツェンが、著作した〔。その〕筆受者〔の役〕は、沙弥コンチョック・テンジン⁸⁾が行った。これもまた一切衆生が安楽国土に入る因となりますように。吉祥であれ。」

・解題

祝詞の後に、本書が無量光仏の仏殿「トンワ・トンデン（見ると有益なもの）」の寺誌（dkar chag）として提示されることを述べて、科段を1）建立者の前後生の行状を少し述べる、2）勝者無量光が発心をなさったさまと国土の功德の簡略を述べる、3）寺院およびその所依・能依がどのように建立されたかのありさま、との三つに分けている。

第一には、ゴマンの師ガワン・ゲレク（Ngag dbang dge legs）や、活仏ケルサン・ゲレク・ギャムツォの伝記が述べられているが、後半は印刷状態が悪くて読解が困難である。

第二には、無量光仏の前世における発心として、〈悲華経〉の記述を示している。すなわち、離諍王が宝蔵如来のもとで発心して、善き国土を撰取しようとし、宝蔵如来の教示により、西方の十万コーティ国土を過ぎた自在王如来（原典の仏名「帝音自在王」（dBang po'i dbyangs phyugs rgyal po）の転訛と思われる）の「帝王のように美しい」という仏国土において四仏が出た後、そこで無量光仏になること、無量劫に住するので「無量寿仏」、光明により無量の国土を満たすので「無量光仏」と号するという。さらに、〈無量寿経〉において燃灯仏以前の八十の如来に先立つ世自在王仏のもとで法蔵比丘が発心し授記されたということ、さらに〈賢劫経〉〈如幻三昧経〉などにおける無量寿仏や極楽世界の授記を示している。また『無量寿経』（*Tshe mdo* 〈無量寿宗要経〉）の無量寿仏と極楽の無量寿仏は同一か、別異かについて検討すべきであるとする。

極楽国土の諸々の功德については、国土の個々の特性についてパンチェンラマ三世

8) 筆受を行った沙弥コンチョック・テンジンは、『極楽国土経』でも筆受を行っている。これは興味深い点ではあるが、『安楽国土の主無量光、所依能依を合わせたものに関する話の正説 一見ると有益なもののお宝の藤一』との関係について詳細は不明である。

ペルデン・イエシェーの著作（未確認）とチャンキヤー世の『極楽国へ往く速疾道を明らかにする灯火』に沿って説明している。無量光仏の功德についても同様であるが、法身は無辺光（sNang ba mtha' yas）、受用身は無辺寿（Tshe mtha' yas）、変化身は無量光（Tshe dpag med）と釈迦牟尼の経に説かれている、という記述がある。

第三は、1) 所依（仏殿）と能依（本尊）を建立したことそのもの、2) 完成してからダラニを入れて開眼したこと、3) 建立と礼拝・供養・巡礼との利徳という、以上に分けられている。

その第一においては仏殿建立の経緯や安置された諸々の仏像類について言及する。その第二においては、内部に収められたインド・チベットの祖師、特にゲルク派の高僧の遺物類や、諸仏尊のダラニ類・経典類・法具類・聖物を述べている。その第三においては数多くのタントラ・経と、宗祖ツォンカパの行跡やカダム派・ゲルク派の祖師の言葉を引用して論述している。寺院の建立の功德、仏像の建立の功德、礼拝・供養・巡礼の功德を述べているが、所々に無量光仏と関係して、極楽往生するための因となるべきことについても論及している。

結語は、顕密の修行や衆生済度に関する願文であるが、そこにも極楽往生と無量光仏による撰取への祈願が見られる。

・『無量光に依る普賢行の門から死を欺く儀軌 一無死の成就』⁹⁾

・奥書き (6a4)¹⁰⁾

『無量光に依る普賢行の死を欺く儀軌 一無死の成就』といわれるこれは教と証得の功德によって麗しく、+++をもった [モンゴルの] ハルハ右翼のトヨン・エラトニ、パンディット・クンガ・ドルジェが、仏像の黄の絹と三十の金 [の玉] をもった数珠をもって勧めた折に、ギェルケンボ・タグパギェルツェンが大寺タシキル+++にて著作した [。] 筆受者 [の役] は教と正理の論者ラプジャムパ・チュダルギャである。』

9) 'Od dpag med la brten pa'i bzang spyod kyi sgo nas 'chi blu ba'i cho ga —'Chi med grub pa—
cf. rGyal mkhan po Grags pa rgyal mtshan gyi bka' 'bum, dPyad gzhi'i yig cha phyogs bsgrigs (天津古籍出版社) Vol.74 Ca, 'Chi blu 1a-6a6, pp.47-49

10) 'Od dpag med la brten pa'i bzang spyod kyi 'chi blu 'Chi med grub pa zhes bya ba 'di ni lung rtogs yon tan kyis mngon par mdzes shing rab +++ can pa'i Hal ha g-yas ru'i Tho yon e ra(nga?) sto ni Panḍi ta Kun dga' rdo rjes lha dar ser po dang / gser gyi bgrang 'dzin sum cu dang ldan pa'i 'phreng bcas bskul ngor / rGyal mkhan po Grags pa rgyal mtshan gyis Chos grwa chen po bKra shis 'khyil +++ sbyar ba'i yi ge pa ni lung dang rigs pa smra ba Rab 'byams pa chos dar rgyas so //

・ 解題

密教の阿弥陀仏成就法を骨格とした儀軌である。随所に〈無量寿経〉〈阿弥陀経〉に基づく無量光仏や極楽浄土、そこへの往生に関する記述が組み込まれている。特に願文の部分では、無量光仏に対して、自己と一切有情、中でも施主が横死を回避し不死の悉地を賜ることが祈願されている。タイトルにある「死を欺く儀軌」とは、後期密教に説かれる生理的要素を含んだヨーガ作法である。臨終行儀とも関係し、死の前兆が現れたときそれを滅して、死を回避する行法、または死を受容して輪廻を仏道に転化する行法である。本文内の割注は印刷不鮮明のため確認困難である。近い時代の同種の著作として、同じゲルク派のダルマパドラ (Dharmabhadra. 1772-1851) による『〔普〕賢行の死の欺き方』 (*bZang spyod kyi 'chi blu bya tshul*, cf. 東北 No.6321) がある。これも印刷が不鮮明であるが、観自在菩薩に関する儀軌のようであり、〈普賢行願讃〉v.1が引用されている。本書の構成は以下の通りである。

前行として、三宝に帰依し、母である一切衆生を利益するために発心し、次に無量光仏を本尊としたグルヨーガを行う。蓮華と月輪座上の赤フリーヒ字から光が放たれて自利利他を行い、転変した無量光仏に対して、具体的な観想方法を説く。次に無量光仏への七支供養を行う。

次に願文である。まず無量光仏に対して見聞念を行うことにより、横死と生死と小乗の涅槃を滅し、衆生を極楽世界へ引導する仏として無量光仏に祈願する。不死の悉地によって罪障と寿命の妨げを鎮め、不死の金剛身を獲得できるという。「オーン、アーミタバ、フリーヒ、スヴァーハー」、「オーン、バガヴァター」等の寿命のダラニ (*tshe gzung*) を多く称えて、無量光仏がここに来られるよう祈願する。さらに「アムリタ」、「スヴァバーヴァ」等の真言により、空性から生起させたブルム字から供物を作って虚空の如くにし、「オーン、アルガン、アーハ」等の真言によりその供物を捧げて、悉地を賜るよう祈願を繰り返す。さらに「オーン、サルヴァ、タターガタ、マンガラ、プージャ」等の真言を称えて、無量光仏が不死を与えることを観想する。さらに、観音や大勢至のように利他を行うことを祈願する。次に前のように広大な食事を生起させて、無量光仏と眷属に捧げ、最高の悉地と共通の悉地 — 長寿となり、自利利他が成就することを、繰り返し祈願する。さらに普賢供養雲を捧げて、自己と一切有情、特に施主に長寿を賜ること、普賢誓願の力や諦の加持力が示されることを祈願する。最後に普賢行の誓願として「説明と教示と読誦の異熟によって死を欺くことは疑いがない」と誓う。

阿闍仏関係

阿闍仏に關係する典籍には顯密の二作が存在する。すなわち『教主阿闍の国土の功德を述べたもの —梵天の妙音—』(*mGon po Mi 'khrugs pa'i zhing gi yon tan brjod pa —Tshang pa'i dbyangs snyan—*)¹¹⁾ と、『世尊金剛阿闍に依る甚深道のボワ (遷移) —妙喜国土へ赴く階梯—』(*bCom ldan 'das Do rje Mi 'khrugs pa la brten pa'i zab lam 'pho ba —mNgon dga'i zhing du bgrod pa'i them skas—*)¹²⁾ である。前者は顯教の立場からの祈願文が中心である。後者の冒頭には「ここで勝者阿闍に依って妙喜国土に化生して受生する、最高の手段である甚深なるボワ (遷移) を実践するよう望む者は—」とあるように、前者を前提としつつ密教の行法を加えた著作である。

・和訳にあたって

天津古籍出版社刊行影印版を底本とし (cf. 注 1), 原文を注記に回した。その際に『清浄大楽国土誓願』校訂テキスト (Schwieger [1978]¹³⁾) を利用して、天津版『極楽国土経』の原拠典籍を探った。しかし Schwieger が利用した何れの版¹⁴⁾ にも『極楽国土経』は完全には一致しなかった。今回は『清浄大楽国土誓願』との対応箇所を

11) cf. *rGyal mkhan po Grags pa rgyal mtshan gyi bka' 'bum*, dPyad gzhi'i yig cha phyogs bsgrigs (天津古籍出版社) Vol.73 Ca. Mi 'khrugs 1a-4a, pp.149-150

12) cf. *rGyal mkhan po Grags pa rgyal mtshan gyi bka' 'bum*, dPyad gzhi'i yig cha phyogs bsgrigs (天津古籍出版社) Vol.73 Ca. Mi 'khrugs 'pho ba 1a-4a, pp.151-152

13) 書籍の全体像を確認するため、目次を翻訳すれば以下の通りである。

1. 序言 (p.1ff.)
2. 一般の前置き (序文) (p.5ff.)
 - 2.1. 阿弥陀仏と彼の極楽世界 (p.5ff.)
 - 2.2. 誓願と廻向に対する一般的 [理解] (p.15ff.)
3. 極楽願文に対する補足的説明 (p.37ff.)
 - 3.1. 著者 (p.37ff.)
 - 3.2. テキストの記述 (p.40ff.)
 - 3.3. [テキストの] 内容概観 (p.41ff.)
 - 3.4. テキストの構成 (p.42ff.)
 - 3.4.1. ラーガースヤの誓願文 (p.42ff.)
 - 3.4.2. ミーギュル・ドルジェの埋蔵経 (gTer ma) (p.51ff.)
4. 極楽願文 (p.57ff.)
 - 4.1. テキストの版 (p.57ff.)
 - 4.2. 翻訳 (p.72ff.)
 - 4.3. 原文 (p.89ff.)
5. ラーガースヤによって著述された願文の解釈 (p.97ff.)
 - 5.1. 真言とテキストに対する一般的取り扱い (p.97ff.)
 - 5.2. 祈願 (p.99ff.)
 - 5.2.1. 極楽往生に対する四つの条件 (p.100ff.)
 - 5.2.1.1. 極楽の光景と彼の国土 (p.100ff.)
 - 5.2.1.2. 功德の積集 (p.104ff.)
 - 5.2.1.3. 成仏思想の母胎 (p.119ff.) ↗

示すことを中心とする。和訳に際しては内容から本文を細分し、天津影印本、校訂テキスト (cf. Schwieger [1978]), 『極楽願文集成』 (cf. bKra shis [1994]) 所収本の対応箇所も記した。〈無量寿経〉などの根本經典と、それらを承けた『清浄大楽国土誓願』との対応については、今後、藤仲孝司氏との協力により明らかにしたいと考えている。なお内容の一部分は『清浄大楽国土誓願』より、〔 〕に入れて補足した。

・『極楽国土経』和訳

1. 西方極楽世界 ギェルケンポ (1b1-2) ¹⁵⁾

(Schwieger : p.57, 1.16-23, 『極楽願文集成』 : p.217, 1.6-12)

「娑婆国土から西の方角の、無数の世界を超えた彼方に、無量光 [仏] の国土である清浄な極楽 [世界がある]。明瞭な意において燦然と現れている。そこに世尊・勝者・無量光 [仏がおられる]。」

2. 阿弥陀仏の特徴 ギェルケンポ (1b2-4) ¹⁶⁾

(Schwieger : p.57, 1.23-30, 『極楽願文集成』 : p.217.1.12 ~ p.218.1.4)

「頭頂に頂髻, 御足に輪 [相] など, 三十二の妙相, 八十の随好により飾られている。手は二つで, 禅定 [印を結び], [そこに] 鉢を携帯している。[上衣, 中衣, 下衣] 三種の法衣を召して, [両足を組んだ] 結跏趺坐により, 千の花弁の蓮華を具え

-
- ↘ 5.2.1.4. 誓願 (p.120ff.)
 5.2.2. 讚嘆, 諱言, 陀羅尼に入るための請願 (p.130ff.)
 5.3. 結論的説明 (p.132ff.)
 6. テキスト諸版の頁対照表 (p.148ff.)
 7. 略語表 (p.149ff.)
 8. 参考書目一覧 (p.151ff.)
 8.1. チベット語の原文 (p.151ff.)
 8.2. 辞書 (p.154ff.)
 8.3. 本文版, 翻訳, 二次的文献 (p.155ff.)
 索引 (p.165ff.)
 付録 : 影印 (テキスト D) (p.183ff.)

- 14) cf. Schwieger [1978] pp.40-41
 以下の四部が校訂資料として用いられている。
 (A) Privatbesitz von Herrn Prof. Klimkeit, Bonn
 (B) Privatbesitz von Herrn Pema Tsering, Bonn
 (C) Besitz des Seminars für Sprach- und Kulturwissenschaft Zentralasiens in Bonn
 (D) Privatbesitz von Dr. Schuh, Bonn
- 15) mi mjed zhing nas nub kyi phyogs mtsham su // grangs med 'jig rten brgal ba'i pha rol na // 'Od dpag med kyi zhing khams bDe ba can // rnam dag gsal ba'i yid la lam mer shar // de na bcom ldan rgyal ba 'Od dpag med //
- 16) dbu la gtsug tor zhabs la 'khor lo sogs / mtshan bzang so gnyis dpe byad brgyad cus spras / phyag gnyis mnyam bzhag steng lhung bzed bsams // chos gos rnam gsum gsol zhing skyil krung gis // padma 'dab stong ldan zla ba'i gdan steng du // thugs rje'i spyang gnyis rgyang nas bdag la gzigs //

た月〔輪〕の座の上に〔、菩提樹に背を寄せられている〕。悲の眼でもって遠くから私を見ておられる。」

3. 阿弥陀仏の眷属 ギェルケンポ (1b4-2a3)¹⁷⁾

(Schwieger : p.57, 1.31-p.58, 1.18, 『極楽願文集成』 : p.218.1.4-p.219, 1.1)

「右には観自在菩薩、左には大勢至菩薩、菩薩の比丘十萬千萬、誰もが金色で、相好によって同様に美しい。三種類の法衣を召して美しく居られる。私は慇懃な三門によって敬礼する。右手の光から変化された観自在〔菩薩〕、さらに変化された百千萬の観自在〔菩薩〕、左手の光から変化された緑のターラー〔明妃〕(sGrol ma ljang), さらに変化された百千萬のターラー〔明妃〕を放出する、主無量光〔仏〕に敬礼する。」

4. 七支供養から敬礼 ギェルケンポ (2a3-4)¹⁸⁾

(Schwieger : p.59, 1.4-10, 『極楽願文集成』 : p.219.1.14-p.220.1.1)

「広大な三千大千世界を無数の宝で満たして、施しを与える者より、無量光〔仏〕の御名と極楽〔世界の名前〕を聞いて、合掌するのが福德が大きいとお説きになった。ゆえに無量光〔仏〕に敬礼する。」

5. 七支供養から供養、懺悔 ギェルケンポ (2a4-b4)¹⁹⁾

(Schwieger : p.59, 1.21-p.60, 1.5, 『極楽願文集成』 : p.220.1.8-p.221.1.1)

「自己の身体と〔受容すべき〕資財および善根、どんな直接に具わった供物であれ、意により化作した吉祥物・七宝、さらには三千〔大千〕世界の四洲・スメール山・日月の百千萬、天・龍・人の〔受用すべき〕無量の資財を、知で受けて、〔供養雲として〕無量光に捧げる。私〔と他者すべて〕を益するために、悲の力で受けとっ

17) gyas su byang chub sems dpa' sPyan ras gzigs // gyon du byang chub sems dpa' mThu chen thob / byang chub sems dpa'i dge slong bye ba 'bum / kun kyang gser mdog mtshan dpe rjes mthun mdzes // chos gos rnam gsum gsol zhing mdzes par bzhugs // bdag gis sgo gsum gus pas phyag 'tshal lo // phyag gyas 'od zer las sprul spyen ras gzigs // yang sprul spyen ras gzigs dbang bye ba brgya // phyag gyon 'od zer las sprul sgrol ma ljang / yang sprul sgrol ma bye ba phrag brgya 'gyed // mgon po 'Od dpag med la phyag 'tshal lo //

18) stong gsum 'jig rten rab 'byams grangs med pa / rin chen gyis bkang sbyin pa byin pa pas // 'Od dpag med kyi mtshan dang bDe ba can / thos nas thal sbyar bsod nams che bar gsungs // de phyir 'Od dpag med la phyag 'tshal lo /

19) bdag gi lus dang longs spyod dge rtsar bcas // dngos su 'byor ba'i mchod pa ci mchis pa // yid sprul bkra shis rtags rdzas rin chen bdun // gzhan yang stong gsum 'jig rten khams kun gyi // gling bzhi ri rab nyi zla bye ba brgya // lha klu mi yi longs spyod dpag med pa // blo yis blangs te 'Od dpag med la 'bul // bdag la phan phyir thugs rje stobs kyi bzhes // pha mas thog drangs bdag sogs 'gro kun gyis // thog ma med pa'i dus nas da lta'i bar // srog gcad ma byin len dang mi tshangs spyod // lus kyi mi dge gsum po mthol lo bshags // rdzun dang phra ma tshig rtsub ngag 'khyal pa / / ngag gi mi dge bzhi po mthol lo bshags // brnab sems gnod sems log par lta ba ste // yid kyi mi dge gsum po mthol lo bshags //

てください。父母を初めとした私たち世の衆生すべては、無始の時から現在まで、殺生・偷盗・不梵行― [これら] 身の不善を三つを発露し懺悔する。妄語・離間語(両舌)・粗悪語(悪口)、綺語― [これら] 口の不善四つを発露し懺悔する。貪心・害心・邪見― [これら] 意の不善を三つを発露し懺悔する。」

6. 七支供養から懺悔²⁰⁾ ギェルケンポ (2b4-5)²¹⁾

(Schwieger : p.60, 1.15-22, 『極楽願文集成』: p.221.1.8-p.221.1.14)

「三界の有情を殺した大きな罪業、菩薩たちを誹謗したこと、諸々の善の利徳・罪の過患を、聞いても真実でない説明程度であると思ったこと、五悪無間罪、[それら] 作ったものがどれ程あろうと、全てを発露し懺悔する。」

7. 七支供養から懺悔、加持祈願 ギェルケンポ (2b5-6)²²⁾

(Schwieger : p.61, 1.6-12, 『極楽願文集成』: p.222.1.7-p.222.1.12)

「以前に造った悪が体内で毒となったように、大きな羞恥・畏怖・悔恨によって懺悔する。今後は命にかかわっても、悪業を行わないと心に堅固な誓いを保とう。善逝無量光およびその弟子は、私の相続が完全に成熟するように加持してください。」

8. 七支供養から随喜、勧請、懇願、廻向 ギェルケンポ (2b6-3a3)²³⁾

(Schwieger : p.61, 1.24-p.62, 1.7, 『極楽願文集成』: p.223.1.2-p.223.1.12)

「親教師と軌範師は奉侍し温和に正直に語ることに、[綺語を捨てて] 義利をそなえた話を語ることに、[貪心を捨てて] 小欲であることに、慈と悲しみを修習し [邪見を捨てて] 法を行わずに、それらの善すべてに随喜する。十方のあらゆる広大な世間において、正等覚してから長らく経っていないで、彼ら [諸仏] に広大な法輪を速やかに転じるよう、私は勧請する。仏・菩薩・持教者・善知識― 一般涅槃したいと願われる者― 彼らすべてが、涅槃しないで [この世界に] 住してくださるよう祈願する。こ

20) 『清浄大楽国土誓願』では懺悔部分に力点がおかれ、そこに多くの文量がさかれる。しかし『極楽国土経』においては十悪懺悔等に限定される。

21) khams gsum sems can bsad las sdig che ba // byang chub sems dpa' rnam la skur ba btab // dge ba'i phan yon sdig pa'i nyes dmigs dag // thos kyang mi bden bshad tshod yin par bsam // mtshams med lnga ngan pa // ji snyed bgyis pa thams cad mthol lo bshags //

22) sngar byas sdig pa khong bar dug song ltar // ngo tsha 'jigs skrag 'gyod pa chen pos bshags // phyin chad srog la babs kyang sdig pa'i las // mi bgyid sems dam bca' brtan po bzung bar bgyi // bde bshegs 'Od dpag med pa sras bcas kyis // bdag rgyud yongs su smin par byin gyis rlobs //

23) mkhan slob bkur shing zhi dul drang por smra // don dang ldan pa'i gtam brjod 'dod pa chung // byams dang snying rje sgom zhing chos la spyod // dge ba de rnam kun la yi rnag ngo // phyogs bcu'i 'jig rten rab 'byams thams cad na // rdzogs sangs rgyas nas ring por ma lon par // de dag rnam la chos kyi 'khor lo ni // rgya cher myur du bskor bar bdag gis bskul // sagns rgyas byang sems bstan 'dzin dge ba'i bshes // mya ngan 'da' par bzhed pa de dag kun // mya ngan mi 'da' bzhugs par gsol ba 'debs // 'dis mtshon bdag gi dus gsum dge ba rnam // 'gro ba kun gyi byang chub thob phyir bsngo //

れを初めとして、私の〔過去・未来・現在の〕三世の〔諸々の〕善すべてを、一切衆生の菩提の獲得のために廻向する。」

9. 往生祈願 (1) ギェルケンポ (3a3-5) ²⁴⁾

(Schwieger : p.66, 1.1-9, 『極楽願文集成』 : p.227.1.8-1.15)

「十万千万ナユタの仏と、八十四の仏国土すべての、あらゆる功德の莊嚴を一つにまとめたかの極楽国土に、生まれますように。宝の大地は表面が平らで、掌のよう。広く大きく明るく光輝く。〔足で〕踏むと下がるし、〔足を〕上げると戻る。安楽で穏和なかの国土に生まれますように。」

10. 往生祈願 (2) ギェルケンポ (3a5-b2) ²⁵⁾

(Schwieger : p.66, 1.15-p.67, 1.4, 『極楽願文集成』 : p.227.1.18-p.228.1.14)

「香水の河は八功德をそなえており、同じく甘露の沐浴の池々は、七宝の階段と垣で囲まれている。蓮華については無量の光明を放つ。〔その〕光の先端から無量の化身が発する。大いに希有なるその国土に生まれますように。八難と悪趣という言葉は知られていない。煩惱・五毒・三毒・病と魔・敵と、貧乏・困窮・闘争など、全ての苦の名称も存在しないかの極楽国土に、生まれますように。女性はいないし、胎生はない。すべては蓮華の蕊から誕生なされた。五神通と五眼がすべての者にある。功德が無量である〔その〕国土に、生まれますように。」

11. 往生祈願 (3) ギェルケンポ (3b2-4b2) ²⁶⁾

(Schwieger : p.67, 1.5-p.69, 1.10, 『極楽願文集成』 : p.228.1.14-p.231.1.10)

- 24) sangs rgyas bye ba khrig khrig brgya stong dang // brgyad cu rtsa bzhi'i sangs rgyas zhing kun gyi // yon tan bkod pa thams cad gcig bsdus pa // bDe ba can gyi zhing der skye bar shog // rin chen sa gzhi khod snyoms lag mthil ltar // yangs shing rgya che gsal zhing 'od zer 'bar // mnan na nem shing btegs na spar byed pa // bde 'jam yangs pa'i zhing der skye bar shog //
- 25) spos chu'i chu klung yan lag brgyad ldang dang // de bzhin bdud rtsi'i khru kyi rdzing bu rnams // rin chen sna bdun them skas pha gus bskor // padma'i 'od zer dpag tu med pa 'phro // 'od zer rtse las sprul ba dpag med 'gyed // ya mtshan chen po'i zhing der skye par shog // mi khom brgyad dang ngan song sgra mi grags // nyon mongs dug lnga dug gsum nad dang gdon // dgra dang dbul phongs 'thab rtsod la sogs pa // sdug bsgal kun gyi ming yang med pa yi // bDe ba chen gyi zhing der skye bar shog // bud med med cing mngal nas skye ba med // thams cad me tog padma'i sgrub nas 'khrungs // mngon shes lnga dang spyen lnga kun la mnga' // yon tan dpag med zhing du skye bar shog //
- 26) dri zhim rlung gis me tog char chen 'bebs // shing dang padoma chu klung thams cad las // yid du 'ongs pa'i gzugs sgra dri ro reg // longs spyod mchod pa'i sprin phung rtag tu 'byung // 'dug par 'dod tshe rin chen gzhal yas khang // nyal bar 'dod tshe rin chen khri bzang steng // dar zab du ma'i mal stan sngas dang bcas // bya dang ljon shing glu dang rol mo sogs // thos par 'dod na snyan pa'i chos sgra sgrogs // mi 'dod tshe na de dag sgra mi 'byin // bdud rtsi'i rdzing bu chu klung de rnams kyang // dro grang gang 'dod de la de ltar 'byung // yid bzhin 'byung ba'i zhing du skye bar shog // zhing der rdzogs pa'i sangs rgyas 'Od dpag med // bskal pa grangs med mya ngan mi 'da' bzhugs // nam zhig 'Od dpag med de zhi bar gshegs // bskal pa Gang gā'i klung gi bye ma snyed ↗

「芳しい香りの風により、花の大雨が降る。木と河と蓮華のすべてから、快い色・声・香・味・触の、受用を〔生み出す〕供養雲の蘊が常に生ずる。〔行住坐臥の行儀について〕住みたいと願ったとき、宝の無量宮〔がある〕、寝たいと願ったとき、宝の妙座の上、多くの良い絹の臥所および枕〔がある〕、鳥と樹木、河の音楽など、聞きたいと願ったとき、麗しい法音を響かせる。願わないときには、それらの音は知られない。甘露の池、河それらもまた、温度が願った通りになり、意のままに生じる〔その〕国土に生まれますように。

その国土には正等覚者・無量光〔仏〕が、無数劫に涅槃しないで住しておられる。いつか、かの無量光〔仏〕が寂滅に逝かれる〔とき、その後、〕ガンジス河の砂ほどの二つの〔無数の〕劫の間、教えが住するとき、摂政〔である〕観自在と離れないで、その面前で正法を聞けますように。夕べに正法が沈んだ〔夜の〕暁に、かの観自在〔菩薩〕が正等覚してから、吉積王（dPal brtsegs rgyal po）と名づけられた者となったとき、拜謁供養し、正法を聞けますように。寿命の六百六十万のコーティ・ナユタに住しておられるとき、常に侍者となり親近恭侍するし、不忘の陀羅尼により正法を受持しますように。〔その如来がやがて〕涅槃してから、その教えは六十三億劫、そのとき法を受持し、大勢至〔菩薩〕と常に離れませんように。次に、かの大勢至〔菩薩〕が仏となってから、善住珍宝山王如来となり、寿命と教えは観自在と等しい。常にかの仏の侍者になり、供養により供養し、正法を受持しますように。次に、私の生涯が変わるやいなや、かの国土から他の浄土において、コーティ・ナユタの仏

↘ // gnyis kyi bar du bstan pa gnas pa'i tshe // rgyal tshab sPyan ras gzigs dang mi 'bral zhing // de yi mdun du dam chos nyan par shog // srod la dam chos nub pa'i tho rangs la // sPyan ras gzigs dbang mngon par sangs rgyas nas // dPal brtsegs rgyal po zhes byar gyur pa'i tshe // zhal mthong mchod cing dam chos nyan par shog // sku tshe bskal pa bye ba khrag khrig ni // 'bum phrag drug bcu rtsa drug bzhugs pa'i tshe // rtag tu zhabs "bring bsnyen bkur byed pa dang // mi brjed gzungs kyis dam chos 'dzin par shog // mya ngan 'das nas de yi bstan pa ni // bskal pa dung phyur drug dang bye ba phrag // 'bum phrag gsum pa de tshe chos 'dzin zhing // mThu chen thob dang rtag tu mi 'bral shog // de nas mThu chen thob de sangs rgyas nas // de bzhin gshegs pa Rab tu brtan pa ni // yon tan nor bu brtsegs pa'i rgyal por gyur // sku tshe bstan pa sPyan ras gzigs dang mnyam // sangs rgyas de yi rtag tu zhabs 'bring rtag tu byed // mchod pas mchod cing dam chos 'dzin par shog // de nas bdag gi tshe rabs rjes ma thag // zhing khams de nas dag pa'i zhing gzhan du // sangs ryas bye ba khrag khrig bsnyen ba gur te // bla med rdzogs pa'i sangs rgyas thob par shog // rdzogs sangs rgyas nas 'Od dpag med pa ltar // mtshan thos tsam gyis 'gro kun smin cing grol // sprul pas grangs med 'gro ba 'dren pa sogs // 'bad med lhun grub 'gro don mthar phyin shog // Tshe dang ye shes dpag med bcom ldan 'das // Chos sku snang ba mtha' yas mtshan 'dzin pa // sngon gyi las kyi rnam smin ma gtogs pa // me chu gcan gzan gnod sbyin srin po sogs // 'jigs pa kun las skyob par thub pas gsungs // bdag ni khyed kyi mtshan 'dzin phyag 'tshal gyis // 'jigs dang sdug bsngal kun las skyobs pa dang // bkra shis phun sum tshogs par byin gyis rlobs // sangs rgyas sku gsum brnyes pa'i byin rlabs dang // chos nyid mi 'gyur bden pa'i byin rlabs mthu // dge 'dun mi phyed 'dun pa'i byin rlabs kyis // ci btab bsngo ba smon lam 'grub gyur cig //

に親近恭敬し、無上の正等覚を獲得しますように。正等覚してから、無量光 [仏] のように、名前をただ聞いたほどにより、[世の] 衆生すべては成熟して解脱し、無数の変化が衆生を導くことなどを、努力なく自然に成就し、衆生利益が究竟しますように。世尊・無量寿智 [仏]、法身・無辺光 [仏] よ、[あなたの] お名前を受持する者は、かつての業の異熟以外は、火・水・猛獣・羅刹などなどの、恐れすべてから救護すると、牟尼は説かれました。私はあなたのお名前を受持し、帰命するので、あらゆる恐怖と苦からの救護と、吉祥が円満であるよう加持してください。仏 一三身を獲得した者一 の加持と、法性 一変わらない諦一 の加持の力と、僧伽 一 [分裂しない] 和合僧一 の加持により、何であれたたてた廻向の誓願が成就しますように。」

12. 奥書き ギェルケンポ (4b3-4) ²⁷⁾

「+++の善知識であるコンチョクサンポと、工巧明の論者ガクワン・ヤンベルの二人が懇懇にお願いした折に、ギェルケンポ・タクパギェルツェンがシモ・チュンのデデン・チュキボタンにおいて著作した [。その] 筆受者 [の役は] は沙弥コンチョック・テンジンが行った。これ [の著作の善] によっても教えと衆生に広大な利益が生じますように。善かれ。」

・付録 インドにおける「経」四義 一〈大乘莊嚴經論〉「述求品」の事例—²⁸⁾

・梵本：〈大乘莊嚴經論〉(cf. cp.11.v.3ab, cf. Levi [1907] p.54)

「依処 (āśraya) から、相 (lakṣaṇa) から、そして法 (dharma) と義 (artha) の教示から経 (sūtra) である。(v.3ab)」

「世親釈：[経律論] 各々にどのように四種類の義があるのか。依処と相と法と義の教示から経である。

そのうち「依処」は、どの場所で、誰によって、誰のために説いたかである。

「相」は、世俗諦の相と勝義諦の相である ²⁹⁾。

27) +++gi dge ba'i bshes gnyen dKon mchog bzang po dang / bzo rigs smra pa dNgag dbang yang 'phel? gnyis kyis nan tan du bskul ba'i ngor / rGyal mkhan po Grags pa rgyal mtshan gyis gZi mos chung bDe ldan chos kyi pho brang du sbyar ba'i yi ge pa dGe tshul dKon mchog bstan 'dzin gyis bgyis pa 'dis kyang bstan 'gro la phan pa rgya chen po'i byung par gyur cig // dge'o //

28) cf. 袴谷, 荒井 [1993] p.95, 長尾文庫 [2007] pp.25-26, 宇井 [1979] p.193

29) 〈解深密経〉序文以下に対応が見られる。〈瑜伽師地論〉「菩薩地」撰決撰分 (cf. 『瑜伽師地論』卷第七十五) にも対応が見られる。

30) 例えば〈稲竿経〉には Skt. sūtra (Tib.mdo) で「法」を意味する用例がある。以下の通りである。

cf. Jeffrey D. Schoening [1995] vol.2, p.701

「具寿舍利弗は弥勒菩薩に次のように言いました。稲の茎を見下ろして比丘たちに次の法 (Skt. sūtra, Tib.mdo) を語りました。『比丘たちよ、縁起の見る者は真理を見ます。真理 ↗

「諸法」は、[五] 蘊と [十八] 界と [十二] 処と [四] 食と縁起³⁰⁾ 等々である。

「義」は、相合 (anusam̄dhi)³¹⁾ である。」

・漢訳：無著菩薩造，唐波羅頗蜜多訳『大乘莊嚴經論』卷第十二「述求品」(cf.『大正』31, No. 1604, pp.609c28-610a5)

「依故及相故 法故及義故 如是四種義 是說多羅義

釈曰。修多羅有此四義。一依，二相，三法，四義。依者は処是人是用。謂隨是何国土。隨是何諸仏。隨是何衆生。如來依此三種，說修多羅。相者謂世諦相，及第一義諦相。法者謂陰界入縁生諦食等法。義者謂積所以」

・蔵訳：安慧復註 (*mDo sde rgyan gyi 'grel bshad*. cf. D. 東北 No.4034, Mi.157b5-158a4)

「諸依処と相と法，義を教示するから経である (gnas rnam dang ni mtshan nyid dang // chos don ston phyr mdo yin no //)」ということについて，依処と相と法の義 [すなわち経の] 四種類を教示するために「経 (mdo sde)」という。

そのうち依処に三種類ある。[すなわち] どの場所で説いたかと，誰が説いたのかと，誰のために説いたかである。それもそれら「経 (mdo sde)」から，「このように私が聞いたある時に，世尊は王舎城で多くの比丘と菩薩 [と] 一同に居られた ('di skad bdag gis thos pa'i dus gcig na bcom ldan 'das rgyal po'i khab na dge slong dang / byang chub sems dpa' mang po dang thabs cig tu bzhugs so)」とお説きになった。そのように「王舎城」等々がどの場所で説いたかである。それも [経の] 依処であると教示した。「世尊」一，誰が説いた内容かを教示した「世尊」も [経の] 依処であると教示した。「人間」一，誰のために法を説いたか [を教示した] 人間，それも依処である

↘ を見る者は仏を見ます』と語って世尊は黙っておりました。世尊によって説かれたこの法 (Skt. sūtra, Tib.mdo) にはいかなる意味がありますか) (āyusmān śāriputro maitreyaṃ bodhisattvam etad avocat / śālistambam avalokya bhikṣubhyaḥ sūtram idam uktam—yo bhikṣavaḥ pratītyasamutpādaṃ paśyati sa dharmam paśyati, yo dharmam paśyati sa buddham paśyati, ity uktvā bhagavāms tūṣṇim babhūva / tad asya bhagavatā bhāṣitasya sūtrasya ko 'rthaḥ?)

(対応箇所をカメラシーラの注釈で確認したが特に注意は払われていない。)

(31) *Mahāvīryūtpatti*, 2176 (93) (cf. 榊 [1981]) には「Skt. anusam̄dhi, Tib. 'tshams sbyor ba, 漢相合，和連絡」とあるため一応「相合」と訳したが，長尾 [2007] p.26 は蔵訳，安慧復註により，「Skt. abhisam̄dhi」(密意) と理解されている。以下の通りである。

「辞書には Skt. anusam̄dhi に密語の意味は見られないが，T1, T2. : *dgongs pa* による。Vṛtti. は *dgongs pa bzhi pa* という。abhisam̄dhi と改訂すべきか。(中略) abhisam̄dhi は普通は *ldem po or ldem por dgongs pa*.

『撰大乘論』ii. 31A.B に，あらゆる仏語には四種意趣と四種密語があるといい，それらが詳細に説かれている。その後者を指すのであろう」(cf. 長尾 [1999] p.396ff.)

と教示した。

相に二種類ある。世俗諦の相と勝義諦の相である。

そのうち〔胴、首、口による〕瓶と、〔縦糸、横糸による〕布と、〔五蘊による〕人間というもの等々を句 (tshig) として述べつつ、思念しえる (bsam du rung ba) ものごとが世俗諦の相である。言説 (brjod) しえなくて、思念しえない (bsam du mirung ba) ものごとが勝義諦の相である。あるいは言説と言説以外の感覚器官 (根) の行境となったもの (例六境) が世俗諦である。言説以外であり、観待せず、感覚器官 (根) の行境とならないものが勝義諦である。さらには染汚の所縁境界となったものが、世俗といわれる。法界と無分別智が勝義諦といわれる。〔五〕蘊と〔十八〕界と〔十二〕処と四食 (zas bzhi) と縁起等々が法といわれる。「四食」とは段食と、触食と、思食と、識食である。

四密意 (dgongs pa bzhi pa) が義といわれる。(以下「論の義」のため省略)

参考文献

宇井伯寿

- ・『大乘莊嚴經論研究』, 岩波書店, 1979年

小野田俊蔵

- ・「チベット撰述の浄土教仏典」(『佛教大学大学院研究紀要』7, 1979年)
- ・「ツォンカパ造『最上国開門』試訳 ―チベットに於ける本願思想受容の一例として―」(『仏教文化研究』27, 1981年)
- ・「西藏仏教の浄土教理解」(浄土宗総合研究所『現代における法然浄土教思想信仰の解明』, 2000年)

香川孝雄

- ・『浄土教の成立史的研究』, 山喜房仏書林, 1993年

梶濱亮俊

- ・『チベットの浄土思想の研究』, 永田文昌堂, 2002年

柳亮三郎編

- ・『梵藏漢和四訳対校翻訳名義大集』, 国書刊行会, 1981年

大本山成田山新勝寺

- ・『チベット仏教弘通のすがた』, 1997年

長尾雅人

- ・『撰大乘論 ―和訳と註解―』上, 講談社, 1999年

長尾文庫

- ・『『大乘莊嚴經論』和訳と註解 ―長尾雅人研究ノート― (2)』, 2007年

袴谷憲昭, 荒井裕明

- ・『大乘莊嚴經論』(「新国訳大藏經」瑜伽・唯識部12), 大蔵出版, 1993年

藤仲孝司

「カルマ・チャクメーの阿弥陀仏信仰と選択 — 『山法・独居修行の教誡』より第42章「国土の選択・財宝を受けとる船主」試訳 —」（『佛教大学総合研究所紀要別冊 浄土教典籍の研究』, 2006年）

藤仲孝司, 中御門敬教

- ・「チベットにおける阿弥陀仏信仰の形態 — 阿弥陀仏に関するダライラマ七世の信仰と実践 —」（『佛教大学総合研究所紀要』10, 2003年）
- ・「阿弥陀仏に関するジターリの信仰と実践 — 「鼓音声ダラニ」「宗要経」からの流れ・ダツェパの儀軌を参照して —」（『佛教大学総合研究所紀要』11, 2004年）
- ・「阿閼仏に関するチョネ・ダクパシェードゥップの信仰と実践 — 東西二つの浄土とそこへの往生について —」（『佛教大学総合研究所紀要』14, 2007年）

宗川宗満

- ・「完全清浄極楽国土誓願」（『浄土学』5,6, 1923年）

bKra shis

- ・ *bDe smon phyogs bsgrigs, stod & smad*, 四川民族出版社, 1994

Jeffrey D. Schoening

- ・ *The Śālistamba Sūtra and its Indian Commentaries*, Vol.1 & 2, Wien, 1995

Matthew T. Kapstein

- ・ “Pure Land Buddhism in Tibet? From Sukhāvātī to the Field of Great Bliss” (*Approaching the Land of Bliss Religious Praxis in the Cult Amitābha*, edited by Richard K. Payne and Kenneth, A. Kuroda Institute Book, University of Hawai'i Press, K. Tanaka, Honolulu)

Peter Schwieger

- ・ *Ein tibetisches Wunschgebet um Wiedergeburt in der Sukhāvātī*, St. Augustin, 1978

Sylvain Levi

- ・ *Mahāyānasūtrālamkāra*, Paris, 1907

（付記 本稿は藤仲孝司氏との共同研究の成果である。同氏により和訳添削の詳細な御教示を頂いた。）

（なかみかど けいぎょう 嘱託研究員）